

Peshawar-kai

ペシャワール会報

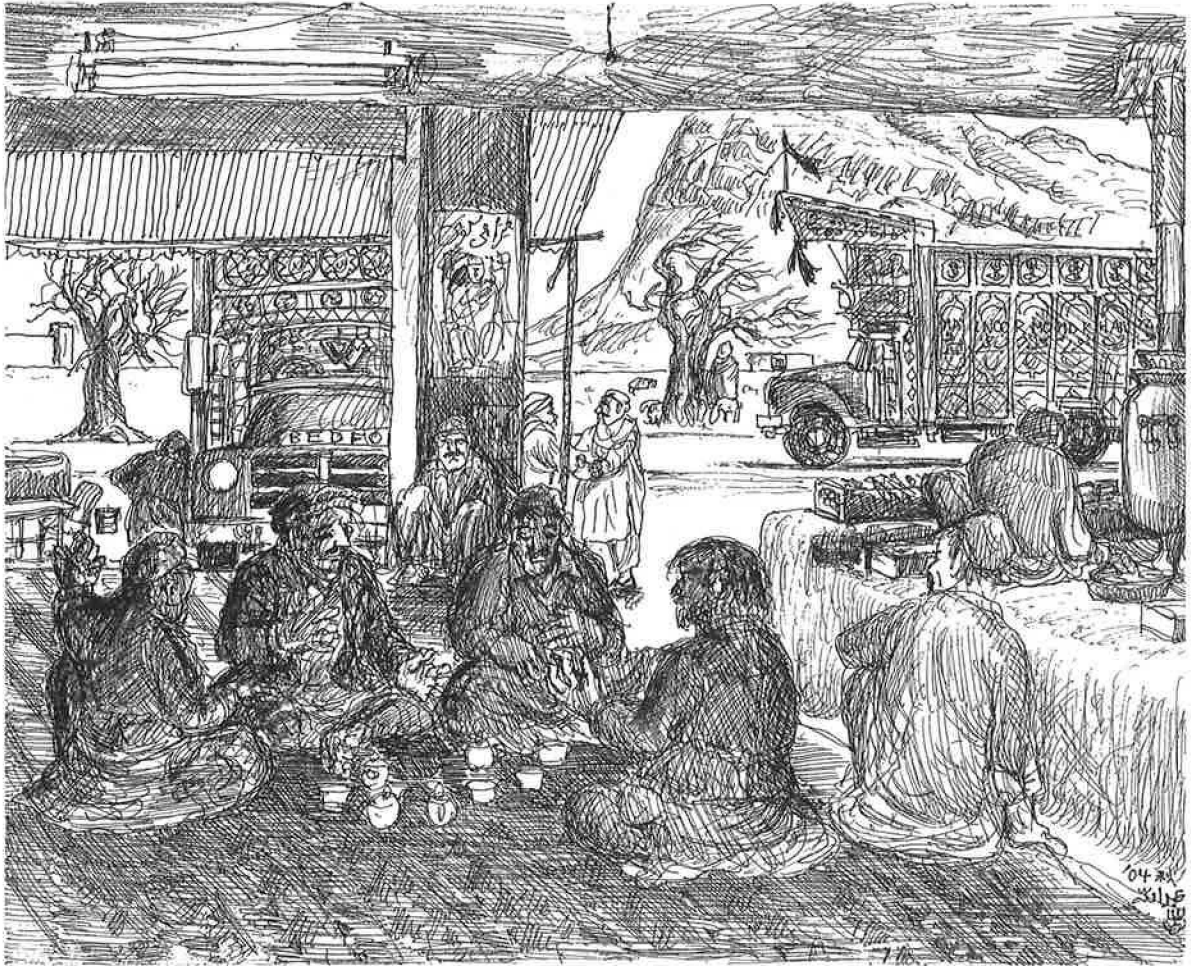
ペシャワール会事務局
〒810-0041 福岡市中央区大名
1-10-25 上村第2ビル307号室
TEL 092 (731) 2372
FAX 092 (731) 2373

No.81

2004年10月13日

〈URL〉 <http://www1m.mesh.ne.jp/~peshawar/>

〈E-mail〉 peshawar@mx.mesh.ne.jp



表紙絵 四人の合奏 甲斐大策

わが内なるゴージュ

中村 哲

頼もしきアフガン・レイバーたちと

鈴木 学

共に働く、人と人を結ぶ

神戸秀樹

適材適所のジャララバード事務所から

橋本康範

PMSの庭師トリオ

中山博喜

アフガン復興、まずは人々の生活から

ズィア・ウル・ラフマン

ペシャワール会の活動は、1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています。

●イーハトーブ賞（宮沢賢治学会主催）受賞に寄せて

わが内なるゴーンシュ 愚直さが踏みとどまらせた現地

PMS（ベシャワール会医療サービス）総院長 中村哲

セロ弾きのゴーンシュ

まず授賞式に出席できなかったことを深くお詫び申し上げます。現在アフガニスタンでは未曾有の早魃が更に進行し、数百万人が難民化していると言われております。この早魃で数え切れぬ人々が飢餓に直面していました。実際、多くの人々が私の目前で命を落としました。

しかし、四年前の「アフガン空爆」以後、華々しい「復興支援」の掛け声にもかかわらず、徒に政治情勢や国際支援のみが話題となり、人々の本当の困窮はついに国際世論として伝わらなかつたのです。そこで私たちとしては、国民の八割以上が農民であるアフガニスタンで、何とか現地の主食である小麦の植付け前に、多くの土地を潤そうと、一年半前から用水路建設に着工、今この挨拶を現場で書いています。小生が居ないと進まぬことが余りに多く、どうしてもここを離れられませ

ん。おそらく「ヒデリノトキハナミダヲナガシ／サムサノナツハオロオロアルキ」というくだりをご記憶の方ならば、理解いただけるかと、非礼をば省みず、書面で受賞の辞をお送りします。

小生が特別にこの賞を光栄に思うのには訳があります。

この土地で「なぜ二十年も働いてきたのか。その原動力は何か」と、しばしば人に尋ねられます。人類愛というのも面映いし、道楽だと呼ぶのは余りに露悪的だし、自分にさしたる信念や宗教的信仰がある訳でもありません。良く分からないのです。でも返答に窮したときに思い出すのは、賢治の「セロ弾きのゴーンシュ」の話です。セロの練習という、自分のやりたいことがあるのに、次々と動物たちが現れて邪魔をする。仕方なく相手しているうちに、とうとう演奏会の日になってしまふ。つつきり楽長に叱られると思つたら、意外に



灌漑用水路の掘削作業員たちとともに（最前列左から6人目が中村医師）

も賞賛を受ける。

私の過去二十年も同様でした。決して自らの信念を貫いたものではありません。専門医として腕を磨いたり、好きな昆虫観察や登山を続けたり、日本でやりたいことが沢山ありました。それに、現地に赴く機縁からして、登山や虫などへの興味でした。

天から人への問いかけ

幾年か過ぎ、様々な困難——日本では想像



護岸のため植林した柳も徐々に生長

できぬ対立、異なる文化や風習、身の危険、時には日本側の無理解に遭遇し、幾度か現地を引き上げのことを考えぬでもありませんでした。でも自分なきあと、目前のハンセン病患者や、早魃^{かんぱつ}にあえぐ人々はどうなるのか、という現実を突きつけられると、どうしても去ることが出来ないのです。無論、なす術が全くなければ別ですが、多少の打つ手が残されておれば、まるで生乾^{なま}きの雑巾^{ぞうきん}でも絞るように、対処せざるを得ず、月日が流れていきました。自分の強さではなく、気弱さによつてこそ、現地事業が拡大継続しているという

のが真相であります。

よくよく考えれば、どこに居ても、思い通りに事が運ぶ人生はありません。予期せぬことが多く、「こんな筈^{はず}ではなかった」と思うことの方が普通です。賢治の描くゴーシユは、欠点や美点、醜^{みにく}さや気高さを併^あせ持つ普通の人が、いかに与えられた時間を生き抜くか、示唆に富んでいます。遭遇する全ての状況が——古くさい言い回しをすれば——天から人への問いかけである。それに対する応答の連続が、即ち私たちの人生そのものである。その中で、これだけは人として最低限守るべきものは何か、伝えてくれるような気がします。それゆえ、ゴーシユの姿が自分と重なって仕方ありません。

私たちは、現地活動を決して流行りの「国際協力」だとは思っていません。地域協力とも呼ぶ方が近いでしょう。天下国家を論ずるより、目前の状況に人としていかに応ずるかが関心事です。

世には偉業をなした人、才に長けた人はあまたおります。自分のごとき者が賞賛的になるなら、他にも……と心底思います。しかし、この思いも「イーハトーブ」の世界を心に刻んだ者なら、「この中で、馬鹿で、まるであつてなくて、頭のつぶれたような奴が一番偉いんだ（「どんぐりと山猫」）」という言葉

葉に慰められ、一人の普通の日本人として、素直に受賞を喜ぶものであります。どうもありがとうございました。

*本文は、去る九月二十二日、岩手県花巻市で行われた宮沢賢治学会主催イーハトーブ賞授賞式において、欠席した中村医師に代わり出席した福元広報担当理事によつて代読されたものです

中村哲（なかむらてつ）

九州大学医学部卒。専門は神経内科（現地では内科・外科もこなす）。国内の病院勤務を経て、一九八四年パキスタン北西辺境の州都ペシャワールに赴任。以来二十年にわたりハンセン病コントロール計画を柱にした、貧民層の診療に携る。一九八六年からはアフガン難民のための事業を開始、現在アフガン北東山岳部に三つの診療所を設立、診療にあたっている。九八年には基地病院PMSをペシャワールに建設。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も行っている。二〇〇〇年以降は、アフガニスタンを襲った大旱魃対策のための水源確保（井戸掘り・カレーズの復旧・作業地千ヶ所以上）事業を実践。さらに二〇〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を継続、昨春からはその一環として灌漑水利計画に着手。年間診療数約十六万人（二〇〇三年度）。

*ワーカー通信

頼もしきアフガン・
レイバーたちと

灌漑用水路計画担当 鈴木 学

噛みしめた「流しそうめん」

九月二日。木曜のこの日は、こちらでは週末に当たる。金曜日はみなマスクでお祈りをする安息日で仕事は休みだ。カナル（水路）スタッフも勤務時間（五時半～十三時半）が終わるとみな引き潮のごとく家路を急ぐ。給料日と重なったこの日は尚更で、真剣を通り越して殺気立つ。客観的に、仕事のとときより険しい表情のスタッフが多いと思う。見ているこっちが笑ってしまうほどだ。ジャララバードに乗っていく車が無いと騒いでいる。スタッフ全員が車に乗れたのをヌールザマーンと確認して、自分たちも帰路に着く。木曜だけはほぼ毎日の残業もなし。自分はこの週末の感じが大好きだ。「ああ、今週も無事に終

わったな」と、嬉しさをかみしめる。

ジャララバードのスタッフハウスに帰り着く（午後三時）。そのまますぐにそうめんを食べる準備を始める。日本から送ってもらったそうめんを茹で、麵つゆを作り、海苔を切り、粉末生姜をとく。橋本さんが帰ってきて流しそうめんをすることになる。なんと竹も準備してきている。感謝しながら皆で流しそうめんを食べる。アフガンで我々が最初だろうか。流しそうめんとともに夏が過ぎ去るのを実感する。こちらはまだもう秋である。

作業員の多くは貧しい小作農

今回は自分と共に毎日作業しているレイバー（現場作業員）たちのことを少し紹介しようと思う。自分が直接関係するのは蛇籠作成レイバー（＝作業員。蛇籠用の網を編む、その網で箱を組み立てる）、鉄筋加工レイバー（鉄筋を真直ぐに伸ばす、切る、曲げる）、鉄筋コンクリート打ちレイバー（鉄筋を配置してワイヤーで縛る、ミキサでコンクリートを打つ、その他）と大きく三つのグループに分けることができる。自分は現在コンクリート構造物全般の作業を手がけているため、鉄



水道橋の架橋工事（橋の下を水が通る）。米軍主導の道路工事に備え、二つの横断部を最初に完成させた

筋コンクリート打ちレイバーと大半の時間を共にしている。

彼らの多くは水路建設現場の村に住む。取水口付近に使われた大量の「聖牛」作りにより、冬は取水口の鉄筋コンクリート工事、今は二つの道路の下に水路を通す工事を終えた後、雨水排水用暗渠、水道橋、池の新水門の工事中と、一年以上自分と一緒に鉄筋コンクリートの作業に携わってきた。仕事内容は



ケシ畑の視察に訪れた鈴木ワーカー（右端は小宮ワーカー）

モールド（鉄筋コンクリート用の型枠）用のコンクリートブロック作製、鉄筋切り、鉄筋組み、左官と一緒にモールド作り、ミキサの整備と設置、ミキサーからモールドまでの枠の設置、そしてパキスタン製のすぐ壊れるミキサーを修理しながらのコンクリート打ち作業などである。

作業現場近くに住んでいるため残業や緊急時にも無理を聞いてくれ、自分の手足となつて本当によくやってくれている。皆貧しい小

作農民で子供も多い。父親が死んだ子供も働いている。私も兄弟が多く、小さい頃から農

作業等をよく手伝っていたので彼らの気持ち

が分かる。鉄筋コンクリート作業でもこちら

にある道具や機械での手探りから始まった。

砂利の質が良くないため、こちらではあまり

使用しない太く丈夫な鉄筋を使い、それを組

むために蛇籠用の強いワイヤーを使用するな

ど独自の方法を作り出した。自分が学校で学

んだ理論はこちらのエンジニアも多少は知っ

ている。ただ、過酷な条件の中で現場の状況

に合わせてどれだけ根気強く基礎から手を抜

かずにやれるかは、日本人である自分の具体

的な指示と判断力、士気を保つて先頭で作業

する姿勢にかかってくる。同時にそれに応え

られるチームワークと残業をものもしない

体力を持つレイバーたちの力が必須だ。時に

自分以上に勇敢に作業に向き合ってくれる彼

らと、共に仕事ができる喜びを日々感じなが

ら働いている。

必ず水を――

もちろんPMSスタッフにも強者が揃う。

言語能力が高く、中村先生の指示を的確に

守つて現場をコントロールするのがヌールザ

マーン（二十七歳、この前最初の男児誕生）。

大学卒業後PMSでドラエヌールの井戸掘削

四人の合奏

甲斐大策

……ドゥム・ドゥドゥ・タム・タム・タム
……ナアナア……アヘルの大太鼓ドゥルとタワ
ニのタアブラがリズムを刻み、タタン、タン、タ
ンとワズィールのラバアブが高音の、スパアのアル
モニアムが主旋律を導く。
「アイ、番徴はお前、お前は番徴、その香に寄るは
……」
ワズィールとスパアが唄い始めた。

カーブル南八十キロ、大斜面を降る国道が平
原に尽きるあたり、廃れた宿場がある。唯一のチ
ヤイハナは、二十五年の戦乱の中、トラック・ド
ライバー達に支えられ生き延びてきた。

アヘルは馬鈴薯を週一回、タワニは驢馬三頭分
の木炭を月一回、ワズィールは玉葱とにんにくを十
日に一度、そしてスパアはパーミヤ（オクラ）
や青菜を三日おきに運んでくる。

四人には出稼ぎの職能も地元での仕事もない。
痩せ地にしがみついているしかなかった。そして
戦いは生き抜いた。

年に三、四回、チャイハナで全員が出会うこと
がある。その時には、四十を過ぎた男達の瞳に光
が甦えり、誰からともなく「音」が生まれた。誰
の手にも楽器はない。演奏法も知らない。しかし、
それぞれが個々の得意な楽器を口で、手で真似る
名手だった。それも親代々近隣に知られた名演奏
家達だった。興が乗れば四人は一時間も二時間も
「合奏」し、ドライバー達はバクシーシュ（喜捨）
を弾んだ。

音楽家になり切った時、四人は、無気力な日常
とは丸て別人なのだった。

客から掛け声と手拍子が起り、通りに人が立ち
始める。

ズ・ライ・ワルカワム（私は投票する）と記さ
れた選挙推進ビラが、土埃と糞尿の臭いを運んで
くる風に揺れ、カバブを焼く煙がからみつく。

計画に携わり、水路建設が始まると同時に現場責任者となる。ずっと現場の叩き上げだ。重機のアレンジからカナルに係る多くの問題処理まで一手に引き受け、二年目の現在まさに獅子奮迅しんじんじんの活躍中。時には自分が止めに入らなければならぬほど熱くなる場面も少なくないこの熱血漢がいなければ、水路建設の困難な現場を取り仕切ることはできない。

共に働く。人と人を結ぶ

ジャララバード事務所
神戸秀樹かんべ

「ジャパンに感謝している」

アフガニスタンに来て三ヶ月が経つ。その三ヶ月間働いてみて思うことがある。それは、日本人ワーカーと現地スタッフの役割についてである。それは、点と点、そしてそれを結ぶ線のような関係にあるということである。その関係とはどのようなものか。それは、どちらとも独立してではなく、共に存在するこ

爆破班を率いて数々の岩山を粉碎してきたザルマイヤ、取水口斜め堰せきの建設以後、巨石ハントーとなったローダ運転手ザキルラーなどみな個性豊かだ。

九月九日(木)。三年前のこの日マストド將軍が暗殺され、その関係で昨日から連休になっている(水曜に突然通達があった。アフガンでは休日の前日に政府から発表がある。

とよってはじめて形をなすことができるということである。PMSの現地活動もそれと同じで日本人ワーカーと現地人スタッフの両方が存在してはじめてプロジェクトが実行に移せるのだと思う。それは、中村医師の「援助するのではなく共に働く場」という言葉に通じるものがある。そのことは、言葉ではわかってはいたものの現場で働いてみて、あらためてそのことを実感している。ここでは、点と線に触れながら、私が短い間に感じた日本人ワーカーと現地人スタッフの関係について書きたいと思う。

アフガニスタンに来て初めの約一ヶ月間、私は井戸部門に配属された。そこでは、エンジニア(現地人スタッフ)とともに、一日五ヶ所から十ヶ所の井戸をほぼ毎日巡った。ある日、訪れた井戸で住民がしきりに話しかけて来た。その相手は明らかに、同行したエンジ

かなり迷惑なのだが、もちろん現地スタッフはみなハッピーである)。鬼木さんが一時休暇から帰ってきた。相変わらず元気である。中村先生も近く現場に入られるそうだ。カナル秋の陣はラマダン(断食月)も含め気合が必要だ。9・11から三年。今ここでこうして水路を創っている。ペシャワール会との縁に感謝している。そして、必ず水を。

ニアではなく、現地語のわからない私に対してであった。その時、住民の熱意に圧倒されたと同時に、初めて行った場所での不安を感じた。その言葉の中で聞き取れるのは「ジャパン」と言う言葉のみ、あとは必死に何かを言っているという熱意しか、残念ながらその時点では理解できなかった。その後、エンジニアに通訳してもらおうと、「日本人に感謝している」「PMSに感謝している」というものだったと聞かされた。それを聞いて、私の中で何かすつきりするものを感じた。

それはなぜか。それはその頃、井戸部門で働き始めたばかりで、この部門で日本人ワーカーの果たす役割とは何か、自分より井戸に関する知識のあるエンジニアが果たせない役割とは何かということを考えながら働いていた時期だったからである。その分この出来事は強く印象に残っている。それは、住民(点)



使用中の井戸。下がり続ける推移との格闘が続いている

と日本人ワーカー（点）が現地スタッフ（線）を通して結ばれる関係にあると気付いたからである。仮に住民の立場に立って、感謝の気持ちを書いたとしても、肝心の日本人が来なければ、まさにその感謝の気持ちを直接表すことはできない。また、日本人に伝えなければ、当然こうして、会員の方に直接伝わることもおそらくなかっただろう。まさしく線の役割の重要性を感じた瞬間だった。

アフガン版「点と線」？

また、日本人ワーカーが「線」の役割を果たす場合も当然ある。現在私は事務部門で、特にカナル（灌漑用水路）の物品購入の要請に基づき、ジャララバード市内のバザールで物品購入を主に行っている。カナル側の日本人ワーカー（点）から、「重機のこの部品が欲しい」、また、「この大きさのものを正確に作って欲しい」という要請を受ける。その要請を現地スタッフや店の人（点）に正確に伝えるのが私のような日本人ワーカーの役割である。つまり、線の役割である。

現在カナルで使う水門を作っている。ある日、その水門に使うフックを作り^{かじ}に鍛冶屋へ行った。そこでは、正確に要請どおりに鉄筋を曲げることが要求される。まさに、ミリ単位の仕事である。曲げ終わった鉄筋を見て、店主と現地人スタッフは、「これでOKだろう」といった。しかし、実際メジャーで測ってみると曲げ幅が一ミリ大きかった。それで「これではだめだ」と言っただけより小さく曲げてもらった。その一ミリが、小さいものなのか大きいものなのかは私にも正確にはわからない。しかし、カナル側の要請を正確に伝える、つまり、点と点を結ぶのが線の役割である。そうした微妙な正確さを求められる点に日本人ワーカーが果たせる役割があるのだと

思う。

点と線、推理小説の事件と犯人の関係を表すだけでなく、PMSのそれぞれの役割関係も上のように言い表せるだろう。その点と線の関係は、この会報にも当てはまるのではないだろうか。日本人ワーカーと日本にいる会員の方が点であり、そしてそれをつなぐ線が会報であると思う。ワーカーとしてまだまだ未熟だが、この機会に会員の皆様に対して線の役割の一端を担うことができ大変うれしく思う。

▼寄附をしていただく皆さまへ▼

*当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄附については税金控除の対象となりません。予めご了承頂きますよう、御願いたします。

▼記入は分かりやすく▼

*ご寄附をお送り頂いた郵便払い込み用紙は、郵便局からはコピーが届きますので、判読しづらい場合がございます。楷書で分かりやすくご記入いただければ大変助かります。

▼未使用の切手、ハガキを！

*会報の発送等の通信費に、年間数百万円かかっております。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです。（使用済みハガキ・切手は受け付けておりませんのでご理解下さい）

適材適所の ジャララバード事務所から

農業計画担当 橋本康範

ジャララバード・オフィスの役員会

ジャララバード・サブオフィスにはコミッティーなるものがある。このメンバーにはPMSジャララバード・サブオフィスのオフィス・マネージャであるサディクラ、パール、アシスタント・マネージャであるキアムツディーン、井戸プロジェクトの責任者マスムッラー、会計責任者の松永君、そして私が正式なコミッティー・メンバーである。また臨時として技術部門の責任者ハビブツラー、連絡・記録担当の本田君が関わる。つまりは役員会みたいなものだ。そしてこのコミッティー・メンバーによって一日の主な活動予定や結果、運営に関する大筋や問題について話し合われる。私の役割柄このメンバーと共に仕事をやる時間が必然的に多くなってしまおうので、今回はこのメンバー（現地スタッフのみ）

について紹介していこうと思う。

まずはオフィス・マネージャのサディクラ・パール。年齢は五十代後半で以前はペシャワールの基地病院でオフィス・スタッフとして働いていた。彼の役割は最終的な物品購入の確認や高額支払いがあるときの確認、立会い、スタッフの出欠確認といったことだが、それより政府間との交渉の進め方、そして問題が発生したときにアドバイスをする（彼はパキスタン人ということもあり交渉関係は自ら出て行けない）、といったどちらかというととオフィス顧問のような存在色のほうが強い。

オフィス現場での実質的な仕事をしているのがアシスタント・マネージャであるキアムツディーンである。彼の仕事はオフィス・ワーカーの仕事、車のアレンジ、公的文書の作成、渉外、とほとんどオフィスでの重要な仕事を一手に引き受けている。年齢は三十四歳、昨年結婚し、今年四月にめでたく男児をもうけた。彼はスタッフ間の調整役としてもなくてはならない存在である。例えば、最近、爆薬の購入や輸送、使用が大変難しくなっている。一ヶ月前にも爆薬を輸送している途中に米軍に取り上げられてしまった（もちろんアフガン政府からの許可証を持っていた）。そのため、もう一度アフガン政府にかけ合う



ジャララバード事務所（左が橋本ワーカー）

ためにまずキアムツディーンがアポイントをとるための文書を書き、それを直接政府に持って行く。各セクション間で起き易いトラブルを事前に察知し鎮め、また、日本人とアフガン人スタッフの関係にも気を配る（時にスタッフへの処罰や物品の購入について私が厳しい判断をするので橋本対現地コミッティーメンバーという構造になり、そんなときも彼が力を発揮するときなのである）。

次に井戸プロジェクトの責任者マスムッラ

事務局から

ビデオを作りました 「アフガンを 緑の大地に」

2,000円（税・送料込み）

VHSテープ／約21分

ペシャワール会事務局企画・制作

ペシャワール会発足 20 周年を記念し、ビデオを制作しました。PMS 病院での診察風景や病棟、2000 年ごろの干ばつの大地、井戸の掘削現場や用水路建設現場、農業計画のパイロットファーム等の様子や、現地の人々と中村哲医師、日本人ワーカ達の活動の様子を映像でご覧頂けます。ご希望の方は同封の注文ハガキまたは下記Eメールでご注文下さい。郵便払込用紙といっしょに、通常 1～2 週間でお届けいたします。

予約価格での販売は終了しました

ペシャワール会報 「合本」1983～2004

7月31日をもちまして、予約特価での販売を終了致しました。今後は定価（10500円／税・送料込）となりますのでご了承下さい。こちらも同封ハガキ、またはEメールでご注文下さい。郵便払込用紙とともにお届けいたします。

ペシャワール会事務局

〒810-0041

福岡市中央区大名 1-10-25 上村第2ビル 307

電話 092 (731) 2372 FAX 092 (731) 2373

Eメール peshawar@mx.b.mesh.ne.jp

。彼はおよそ五十人いるエンジニア及びその他の技術者約三十名（機会整備工、爆薬取扱者、石工など）を束ねる。彼の主な仕事は井戸を掘る場所・順序の決定（井戸掘削場調査エンジニアは他にもいる）、技術者の配置転換、そしてもちろん掘削指導。彼はコミッティメンバーの中でも特に優しく真面目な性格の持ち主で安心できるが、時々それが厳しい状況を招くこともある。例えば村人からの井戸の嘆願にはぜひとも応えてやろうと自分やPMSが出来る仕事以上のものを引き受けてしまいたいそうになる。そこで時に私のほう

から断りに出向くこともしばしばである。むくつき男たちの清々しさ

最後にハビブツラー。彼は技術関係の責任者である。例えば現場で使用するウォーターポンプ、（揚水ポンプ）ボーリングマシン（掘削機）、ジェネレーター（発電器）やコンプレッサー（圧縮機）などの機械の使用技術の指導・管理は一切彼に任せてある。彼はとにかく行動がすばやい。こちらがオーダーしたことをあつという間に済ませてくる。特に複雑な物品の購入について力を発揮する。的

確な店から見積もりを取り、しかもしたたかに商談を済ませてくる。このようなメンバーに囲まれての仕事は時に迷走し、時に腹が立ちもするが、いつも決まってさわやかさを感じる。なぜだろう？ インシャツラー（神のみぞ知る）の世界だからだろうか。それもあろうがそれ以上に彼らが陽気で純粋で気持ちのいい奴ら（あえて親しみを込めて）だからだろう。明日もまた彼らとの抱擁から一日が始まる。それが楽しみだったりもする。

PMSの庭師トリオ

PMS会計担当 中山博喜

庭師の菊が品評会で受賞

「病院で働く人」といっても様々で、医師や看護師はもちろん、事務職や調理担当、洗濯係に掃除係、運転手もいれば靴職人に庭師もいて、ちょっと前まで大工や服の仕立屋までいた。

現地報告をさせていただく際、どうしても表舞台である「医療」が中心になってしまつて(当たり前なのだ)、なかなかもつて「庭師のおやじは今……」なんてとこまでお伝えすることが出来ない。

この話はちよつと古くて昨年の暮れのことになるのだが、このなかなかもつてな部分で起こつた、なかなかもつてな出来事である。

毎年のことであるが、年末になると「菊」の品評会がベシヤワール市の主催で行われる。現在PMS病院では三人の職員が庭師として

勤務している。一年中、手を変え品を変え、季節折々の花々でもつて我々を楽しませてくれる。

それでもつてこの三人であるが、彼らもまた毎年恒例の品評会に自分の育てた菊を出品しているのである。年末になると病院内は綺麗に咲き誇つた菊でいっぱいになる。彼らの育てる菊はこれがなかなかもつて優秀という出来が良いらしく、毎年なんらかの賞を受けているようである。そもそも、その品評会に落選があるのかどうか、私はそこところをよく知らないわけだが、彼らが見せてくれる菊は確かに綺麗だ。

で、この年もまた例のごとくで、やっぱり何か受賞したようだ。賞状と記念カップを持つて嬉しそうに病院内を歩き回っている。誰だつて自分の行為を誉められるというのは気持ちが良い。今回は彼らの受賞に対して、病院から褒美として褒賞金を出すことになった。

嘘が真実に……

ふだん庭師にとつて会計室というのは無縁の場所であつて、給料を貰うか、はたまた借金を申し出る時くらいしか用は無い。それ以外で会計室に来る時といえは何かをしでかして注意を受けたり、それこそ罰金を徴収される時くらいなもので、彼らにとつて「会計に



賞状を手にとり得意満面の庭師たち。菊の手入れにいつも余念がない

呼ばれる」ということは良いことではない場合のほうが多い。だがしかし今回は違う。褒賞金が出るのだ。

内線電話を使って彼ら呼び出す。もちろん褒賞金を渡すためだ。ところがこの時、電話をかけた会計係が彼らに対してポソツと呟いたわけである、

「あんたら、植木鉢を割つたやろ……」

おっ！ 吹きやがった！ 彼はシレーツと



換金作物として期待されるお茶も成育中

した顔をしてホラを吹いたわけである。いやこれは冗談であるわけなんだけど、庭師たちがどんな行動をとってくるか、冗談ついでにということでのまま彼らを騙し^{だま}続けてみては如何かということになった。

植木鉢を割った容疑で呼ばれた三人が、しどろもどろしながら会計室のトビラを叩く。我々は不機嫌そうな、いかにも怒ってます風な低い声でもって返事をする。三人が恐る恐る入って来たところで、会計係の一人が彼らを問い詰める、

「で、植木鉢、割ったわけだけど……」

「あ、いやっ、土が、こう出てきたわけで、ね、それ、それっ」

……どうやら本当に割ったようである。

我々は畳み掛けるように領収証へのサインを求める。このサインは褒賞金に対しての受領を確認するためのサインであるわけで、英語で「品評会での評価に対する褒賞」と詳細が記されているわけだが、英語の読めない彼らは何についてのサイン要求なのか全くもって分かっていない。それをいいことに、我々の吹きっぶりもさらに勢いを増す、

「植木鉢の金額ね、三等分して給料から引いとくから。ここにサインして……」

「だから、その、土が、こう出て来たわけで……」

……やっぱり割ったようだ。結局、彼らはなんだかんだ言いながらも領収証にサインをしたわけで、その時点で「ホラ吹き大会」も終了、事実を話して褒賞金を渡した。

庭師の顔が一気に明るくなった。賞状を持って病院内を回っていた、あの時の、いかにも喜び爆発自慢たらたならな顔つきである。

「だろ、そうだろ、割ってないだろ、そうだろよ、ワッハッハ！」

……ぜったい割ったに違いない。

掛け値なしの人間くささ

しかしなんである、彼らのこの単純極まりない行動、これこそ私が現地で生活して「おー、素敵ではないか」と思う瞬間なのだ。

なんというか、土くさい、人間くさいとも言おうか、本来誰もが持ち合わせている何かがあつて、彼らはそれをドバツとありのまま目の前にさらけ出してくる。良いことも悪いこともおかまいなしに、全部、そのまんま。

「しとやか国家・ニッポン」から、いきなりドバツとの世界にやっ来てたりなんかすると、最初は明らかに戸惑う。なんでそんなことをするのだ、どうしてそう言えるのだ、と強烈な拒否反応を起こしてしまったりする時もある。最後までそれを受け入れられない人もいたりするが、時が経ち、彼らとの共同生活を送れば送るほど、そのドバツとの中に人の温もりを感じるようになってくる。

周りの人々からチカライツパイに祝福された庭師たちは、次回もあるのかないのか定かでない褒賞金に夢を馳せながら、今日もまた、色鮮やかな花々でもって我々を楽しませてくれている。

●ベシヤワール会発足二十周年記念・現地活動報告会から

アフガン復興、まずは人々の生活から

NGO活動、支援の継続こそが信頼築く

PMS副院長 ズイア・ウル・ラフマン 聞き手・村上優（ベシヤワール会事務局長）

「各国NGOが撤退する中でも支援を継続していたのがPMSでした」

——私どものPMSの組織ができましたのは一九九五年ですが、ズイア先生は九六年からPMS病院の活動に参加されました。まずズイア先生から、ご自身の紹介と、アフガニスタンの紹介をしていただきたいと思います。

「PMSの活動をご支援して下さるベシヤワール会会員の皆様、寄付をさせていただいている皆様、そしてお集まりの皆様、こんにちは。私はこの素晴らしい国日本で本日開催されますベシヤワール会報告会に出席できますことを大変嬉しく思っております。私は、ズイア・ウル・ラフマンと申します。医師です。一九八四年にカーブル大学を卒業しました。一九六〇年五月十五日、アフガニスタン東部ニングラハル州のソルフロッド郡で生まれました。結婚しておりまして、子供四人、息子三人、娘一人がおります。

大学卒業後、ジャララバード総合病院に四年間勤務いたしました。その後パキスタンに移住し、

USAID（米国国際開発庁）が寄付しているMCI（Mercy Corp International）で九〇年から九三年まで活動しました。そのプログラムが停止した後、ドイツ政府が寄付するドイツのNGOで九三年から九五年まで活動しました。同機関はパキスタン側パロチスタン州のクウェッタに本拠を置いてアフガニスタン内五州で活動していました。このプログラムが終了した後九六年からPMSで働くようになりました。

私の国について紹介いたします。アジアに住む一人のアフガン人として申し上げたいことがあります。中央アジアに位置する私の美しい祖国は、二十五年に及ぶ戦闘で破壊され、多くの殉教者、身体障害者、孤児が生まれました。わが国の経済、教育、防衛制度のほぼ九割が、戦乱によって破壊されました。数ヶ国が自らの政治的目的を達成せんがためにこれらの破壊を行ったのです。幸いこの戦争に加担しなかった国が一国ありました。それが日本でした。現在わが国は首都に限られてはおりますが、徐々に発展しています。日本政府は、アフガニスタン復興支援の第一線に立っています。

全てのアフガン人は日本に感謝しており、日本人を真の友人であると思っています。」

——ズイア先生は九六年からPMSに在籍しておられます。当時、PMSの活動をどのようにご覧になっておられたのか伺いたいと思います。

「旧ソ連軍がアフガニスタンに侵攻して以来、多くのアフガン人は故郷を離れてパキスタンやイランへの移住を余儀なくされました。当時、多くのNGOがパキスタンやイランに居住するアフガン人への支援活動を始めました。残念ながら、こういったNGOのほとんどが旧ソ連軍がアフガニスタンを撤退した後活動を停止しました。ほんの僅かのNGOが残って活動をしていましたが、それも彼らの私益のためであり、アフガン人を助けるためのものではありませんでした。さらにタリバンが登場すると、これらのNGOの全てがアフガニスタンから撤退しました。この時期アフガン人は、多くの困難に苦しみ、『このようなNGOは特定の政府と彼ら自身の利益のために働いているのだ』と考えました。幸いどんなに困難な時期にもアフガン人への支援を続けていたNGOがたった一つありました。それがPMSでした。」

「用水路は多くの難民帰還を促すでしょう」

——ズイア先生はドクターですが、アフガニスタンのプロジェクト全体の現地でのコーディネーターもしています。特に二〇〇一年十月以降の空爆下の食糧援助については、並大抵のことではなかったと思います。アフガニスタンのプロジェクトについてお話しただけだと思います。



20周年記念報告会に出席すべく
来日したジヤ医師

「お話ししたように、全てのNGOが去って行った中、PMSだけが残ってアフガニスタンの人々の支援に当たりました。PMSはアフガニスタン内に、ドラエヌール、ドラエピーチ、ドラエワマの三方所の診療所を運営し、一日に百五十〜二百人の患者さんを診ています。

米国によるタリバン政府への空爆の中、アフガン人は保健医療、経済的問題などさまざまな問題に直面していました。そのような困難な時期にPMSはカーブル郊外に診療所五ヶ所を設立し、何千人もの人々の命を救いました。更に空爆の最中の困難な時期に、食糧配給を行い、何万人もの母親や栄養失調の子供の命を救いました。

アフガニスタン東部、特にソルフロッド郡、ロダト郡、アチン郡、ドラエヌールを襲った大旱魃によって飲料水の汚染のために、多くの人々が病気にかかり命の危険に脅かされました。PMSはこの地域で井戸掘削、カレーズ（伝統的地下水路）再生を行い、多くの命を救いました。そのため水不足のために故郷を離れていた人々が帰郷し

て来ました。

ドラエヌールのブディアライ地区では、灌漑用水がないためにまるで砂漠のようになっていました。そこでPMSは灌漑井戸とアーベ・マルワリド（真珠川）用水路の掘削を開始しました。用水路はジェリババからシェイワ地区まで掘削される予定で、完成すれば三千ヘクタールの土地が灌漑可能となります。毎日七百人以上の作業員が掘削工事に当たっており、用水路完成後には、多くの人々が帰郷できるでしょう。」

——今、アフガニスタンプロジェクトのお話を伺いましたが、本来ズイア先生は、ペシャワールにあるPMS基地病院で医療活動にもあたっております。そのご紹介をしていただきます。

「パキスタンにあるPMS病院では、毎日の外来患者数が三百人以上で、患者さんのための優れた器材・施設を備えています。例えば、超音波診断装置、エコー、内視鏡、脳波形、放射線、心電図、精密検査室などです。またハンセン病、てんかんの患者さんのために、特別検査室も設けています。また手術室もあります。

PMS病院で見られる症例は季節変動があり、夏期に多いのは、腸チフス、マラリア、下痢症、アメーバ症、ジアルジア症、胃腸炎、脱水症、栄養失調です。重症の場合は入院加療をし、一日十人以上の入院患者がいます。ハンセン病の患者さんは反応が始まった時や外傷を訴えた場合に入院します。

PMS病院の他にPMSはパキスタン山岳地帯に二ヶ所の診療所を運営しており、一ヶ所がコー

ヒスタン診療所ですが、現在は閉鎖しています。もうひとつがチトラル地方のラシユト診療所で、一日あたりの診療数は八十〜百人です。」

「PMSはアフガンと日本の架け橋です」

——どうもありがとうございます。現地ではアフガン人、パキスタン人、日本人が協同して働いています。その働きを日本の支援者の方々がサポートしています。日本人に対するメッセージをいただきたいと思います。

「私が先ほど申しましたように、わが国の全ての制度がこの間の戦争と内戦で破壊されました。アフガニスタンの人々が知っているのは戦乱だけでした。しかしそれは、いくつかの国が、アフガン人には戦乱だけしか知らないようにさせ、政治については無知にしようと企図していたからです。このような厳しくひどい情勢下、アフガン人が必要としているのは友好的な国からの支援でした。私が日本の皆様に申し上げたいのは、ただアフガニスタンの歴史に耳を傾けていただきたい、アフガニスタンの現実に耳を傾けていただきたいということです。ニュースや欧米からの情報に頼るのではなく。

このひどい状況から立ち上がるには、アフガニスタンはあまりにも貧しくエネルギーがありませんでした。二十五年間戦争しかなく、全てが破壊され、人々は貧しかった。ここから立ち直るには支援や協力が必要でした。皆様が貧しいアフガニスタンの人々を助けることができる方法があります。それは、PMSの活動を支援することを通じ

て、貧しく苦しんでいる人々を助けていただくことで。

先ほど申しましたように、たった一つのNGOが残ってアフガンを助けてくれた、それがPMSでした。ですから、アフガニスタンの人々が皆様にお願ひしたいのは、PMSの活動を通して支援していただくことです。アフガニスタンの人々はPMSの活動に感謝しています。そのような地元の人々の支援によってPMSワーカーたちは遅くまで屋外で作業をすることができました。これとは対照的に他のNGOメンバーたちは、警察の護衛がなければ移動できません。PMSはアフガニスタンと日本の人々の間の友情の架け橋のようなものです。アフガニスタンの人々はこれからもずっと日本の人々との友情に感謝し、日本の人々からの支援と活動に感謝していくことでしよう。日本の皆様はアフガン人ひとりひとりの心の中の特別な場所にいる大切な方々なのです。

最後に、アフガニスタンと日本の人々との間の友情と兄弟愛が末永く続くことを願っています。



灌漑用水路、取水口の
水門

「政府は人々の生活上よりも選挙に忙しいのです」

「カーブルやアフガニスタン東部で食糧配給をしていらした空爆当時を思い出していただいて、どのような使命感で活動されていたのでしょうか。」「ドクターサーブ中村がカーブルで食糧配給を始めると言われた時には、米国がカーブルに激しい空爆を加えており、非常に厳しい状況でした。全てのNGOはカーブルから逃げ出し、政府もおそらく逃げ出すだろうと考えていました。しかしその考えは間違いでした。なぜなら多くの貧しい人々がカーブルに残っていたのですから。」

まず、私たちは配給のための事前調査を始めましたが、多くの困難がありました。私たちの配給用に準備していた食糧の量は限られていて、これでもかなえる量よりずっと多くの人たちがカーブルにはいました。誰が貧しいのかをどのようにして見分けるかが私たちにとても難しい点でした。

村から村を訪ねて行くと、そこには何百人、何千人の人々が住んでいます。その何千人の中から誰が貧しいのかを特定するのが、私たちスタッフにとっては難しかったのです。各戸のドアをノックして家の中に入れてもらい、人数を数えるとはほとんどが大家族でした。村人たちは、バザールで買って来た干からびたパンのかげらを見せ、それを粉にして水を混ぜて子供たちに与えていると言いました。

もう一つ困難だった点があります。食糧配給を

始めた頃六十人のスタッフがおり、調査や配給作業を終えた夜、スタッフは一ヶ所の事務所に戻って来ました。しかし、当時米軍は大勢の人間が一軒の家に入るのを見つけると攻撃していましたので、とても危険でした。そこでドクターサーブ中村に『どうやってスタッフの安全確保をしたいのでしょうか』と相談したところ、中村先生は『ズィア先生の考えは?』と尋ねられました。『スタッフを二ヶ所の事務所に分散させてはと思いません』と答えたところ、ではそうしようということになり、スタッフの安全を確保するために事務所を二ヶ所にし、スタッフを二グループに分けました。このように困難な状況にもかかわらず、PMSはカーブルやジャララバードの人々に食糧配給を行い支援しました。」

「どうもありがとうございます。生々しくその当時のことを振り返っていただきました。このあたりのやりとりは最近ペシャワール会が出版した『空爆と「復興」』にも少し触れられていますのでご覧ください。それでは会場から何か質問はございますでしょうか。」

質問..私たちがアフガニスタンに対して抱いていたイメージは、現代の世の中に素晴らしい純朴な人々が住んでいる国、バックパッカーたちの理想的な国として目指した人たちもたくさんいました。今二十数年に及ぶさすまじい戦いの中で、ズィア先生がアフガニスタンをどういった国にしたいかという展望があればお聞かせ願いたいと思います。

「暫定政権が設立されて以降多くの国々やNGO

ペシャワール会2005年カレンダー

「信と抱擁の大地」

同封ハガキで予約受付開始

画・甲斐大策

1500円(税・送料込)／A2判オールカラー

*例年ご好評いただいておりますカレンダーが完成致しました。本年も、毎号の表紙絵を飾る甲斐大策氏の作です。

*タイトルは「信と抱擁の大地」。アフガニスタンはイスラムを奉ずる厳格な宗教国家として知られていますが、同時に多民族・多部族の厳しい社会にあって、平時、戦時を問わず「抱擁」という日々の行為を通じ、他者への「信」を貫く人々の世界でもあります。本年のカレンダーでは、人々の様々な「信」と「抱擁」の情景が、雄大な自然とともに7点の画に描かれております。本年もふるってご注文下さい。
*サイズはA2判、オールカラー、2ヶ月1枚、価格は1500円(税込。送料不要)です。*同封のハガキで予約を受け付けております。

【ご注意下さい】

*代金はカレンダー専用の郵便払込用紙をカレンダーと同送致します(後払い)ので、通常の払込用紙をお使いにならないようご注意下さい。払込手数料は不要です。



表紙画「信と抱擁の大地」(油彩)

がアフガニスタンにやってきました。しかし、彼らの活動のやり方は全く異なっていました。例えばある人たちはDDR(武装解除、動員解除、社会復帰)計画を始め、また、ある国はアフガニスタンの人々の生活を変えると約束しました。しかし、アフガニスタンの人々がまず必要としているのは、経済生活を変えることだと私は思います。例えば食べ物、飲み水、他の資源がない人たちがいます。そのような状況でどうやってDDRを遂行できるでしょうか。どうやって他の計画を遂行することができるでしょうか。もし他の国がアフガニスタンを支援したいのであれば、そのような貧しい人々の生活をまず支援していただきたいのです。

政府高官らは、ボン会議で三つの約束をしました。アフガニスタンの人々の生活を向上させる、武器を回収する、権限を専門家に委ねる、というものです。しかし、二年経った今も、武器は回収されておらず、人々の暮らしは変わっておらず、治安も改善されていません。しかし、これまで多くの資金が注ぎ込まれてきました。政府高官らは、選挙をいかに行うかに忙しいのです。しかし、それは高官らの考えることです。普通の人々は誰もそのようなことは考えていません。私は、国造りは下から一歩、一歩段階を踏んで造り上げていくべきで、トップダウン式に一挙に作ることはできないと思います。」

———どうもありがとうございました。

▼お詫びと訂正▼

前号(80号)の会報に一部誤りがございました。深くお詫びするとともに、左記訂正致します。
・8頁 「2003年度収支」中、「収益事業会計」の次行

〈誤〉経費の部→〈正〉収入の部

・4頁3段目「表1」中、

①ドラエ・ビーチ診療所の診療総計

〈誤〉367,152人↓

〈正〉37,402人

②同表、ドラエ・ヌール診療所の診療総計

〈誤〉44,809人↓

〈正〉44,089人

③同表、総計

〈誤〉160,389人↓

〈正〉160,639人

●事務局便り

*宮沢賢治が生まれ育った岩手の花巻市に行った。中村医師に第十四回「イーハトーブ賞」(宮沢賢治学会・花巻市主催)授与が決まり、代理で授賞式に出席するためである。イーハトーブというのは、賢治が岩手の地をある種の夢を込めて呼んだ言葉である。これは「宮沢賢治文学賞」が賢治研究に授与されるのに対し、「賢治精神を生かした社会事業に与えられる賞である。アフガン・パキスタンでの活動が、「人間性に対する深い洞察をもとに、民衆とともに持続的になしてきた実践」として評価されたのである。

*十年ほど前に、高峰テイルリチミールのみえるマストツジの診療所で、宮沢賢治について、中村医師と語り合ったことがある。空には銀河が流れ、山々がくつきり影をつくっていた。

中村医師は、賢治の言葉が「自分の血肉となり、知らず自分を律してきた」として、自分と賢治に共通する感覚について次のように述べている。

・困窮する人々を前にどうすればいいのか。

・異国の地にあつても「人は人である」という普遍的な感覚。

・日本の表現の重心を失わず、中央から離れたところで、人間共通の神髄を開示する。

*二十年を振り返れば、自分の軌跡は「セロ弾きのゴー

シュ」のそれであったと言う。音楽会を前に練習に焦るゴーシュの前に次々とあらわれる動物たち。一見練習の妨げになったかと思えた動物たちとのやり取りが、結果としてセロの見事な演奏へと結実したゴーシュの物語。中村医師は冬の麦蒔きに間に合わせるべく、灌漑水路建設に邁進しているが、イーハトーブへはぜひ訪ねたいと言っている。

◎村から

あるフリー記者に「いったい、この人たちは何がおもしろくて、こんなつまらない作業を延々と続けているのだろうか」と書かれたことがありました。この文章を書いた記者が事務局で会報発送作業を手伝つてみてのサブライズ表現です。そうなんです。会報発送は、名簿整理から封筒の切手、宛名シール貼り、袋詰めと一連の作業です。やってもやっても会報と封筒の山は少しも減らず、気の遠くなるような思いがします。でも、私にとっては、「つまらない作業」どころか、ペシャワール会がほんとに多くの方々に支えられているのだなと実感する時間でもあります。事務局に集う善意の人々のリレーの輪の中に、微々たる力ではあってもお手伝いのできる喜びを味わっています。(TM)

会 則

- ① 本会の名称をペシャワール会とする。
- ② 本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動とともにワーカーの派遣を行なうことを目的とする。
- ③ 本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。
- ⑤ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥ 本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。
- ⑦ 本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。
- ⑧ 役員の改選は毎年総会にて行う。
- ⑨ 毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。
- ⑩ 本会の事務局をFARAHOUSE (〒八一〇一〇〇四一福岡市中央区大名一丁目一〇一三五 上村第二ビル三〇七号 TEL七三二―二三七二)内におく。

中村哲医師の本
空爆と「復興」
—アフガン最前線報告—
9.11テロ直後から2003年末まで、中村医師と現地日本人スタッフから届いた、鬼気迫る活動報告集【2刷】1890円

辺境で診る【3刷】1890円
辺境から見る
ダラエヌールへの道 2100円【3刷】
医者 井戸を掘る 1890円【9刷】
医は国境を越えて 2100円【6刷】
ペシャワールにて 1890円【8刷】

聖愚者 甲斐大策
の物語
「表紙をめぐる小さな物語」が、書下しを加え一冊に 1890円

石風社 福岡市中央区渡辺通2-3-24 TEL. 092 (714) 4838

アフガニスタンの
1260円 **診療所から**
筑摩書房 東京都台東区蔵前2-6-4 TEL. 03 (5687) 2670

ペシャワール会報
「合本」1983～2004
B5判上製1300頁 10500円
注文は直接事務局へ
価格はすべて税込価格(税5%)です